

平和団塊の二〇〇年人生

「初の「三世代平等社会」を達成して」

堀内正範 元『知恵蔵』編集長

(筆名 堀 亜起良 東洋哲学者)

その第六 初の「三世代平等社会」の達成

I ニッポン発二一世紀オリジナル

「歴史的正午」の陽射しを浴びて

クールジャパン「和風」の実景

平和の一〇〇年・一〇〇年の人生

II 「平和団塊」の人びとの横顔

核芯にいる長寿社会担当大臣

「平和団塊」のみなさんの横顔

「三世代平等社会」へのプロセス

III さまざまな高齢社会構想

公的団体としての事業構想

民間活動の現場からの報告
生涯現役活動者の立場で

I ニッポン発二一世紀オリジナル

「歴史的正午」の陽射しを浴びて

わが国の高齢者は、なかでも「戦後っ子」本稿の「平和団塊」世代のみなさんは、いま「歴史的正午」の陽射しを浴びて暮らしているというのが、外から見ただけ「クールジャパン」としての率直な感想なのです。ドイツ人もアメリカ人も中国人も。

「歴史的正午」の陽射し？

そういわれても、正午の陽射しはいつだって明るく変わりはないけれど、とくに暮らの上で際立ってそんな実感がありません。

コロナ禍に遭遇して、「命を守る」医療では弱者としてワクチン接種で優先され、不要不急の外出を控えた「毎日が日曜日」が推奨されましたから、むしろ暮らしの実態としては日陰に置かれているようなのですが。

若い現役世代から見ても、長年苦勞してこの国をこしらえたお年寄りが晩年を安心して暮らしていることには異議などないでしょうし、貯蓄があつて公的年金があつて

企業年金があつて、貯金では利息がつかないからと株式に投資して資産を増やす。六五%が「経済的な暮らし向きに心配がない」と答えている数値だけを聞けば、日々刻苦している働き盛りの人からはためいきが聞かれます。といつても自分の両親は残る三五%のほうですが。

そのうえ最近自治体がコミュニティバスを用意していて、自分で車を運転できなくても役所や病院や買い物に連れていってもらえる。一人暮らしで介護を受けるようになると、お弁当や家の清掃やゴミ捨てまでやつてもらえる。介護も五段階まであつて「包括ケア」として段階に応じて対応してもらえる。医療費は安いし、医療は最良、薬やサプリメントも至れり尽くせり。そして自治体は横比べで良いほうにそろえますから、将来の暮らしも安心です。

たしかにこのままいければ今の高齢者は長い余生であつても「命と暮らし」には心配なさそうに思えます。

これではいまのニッポンの高齢者が「歴史的正午」の陽射しの中にいると感じていないとしたら、世界に「高齢化社会」はありえない、というのが外から見た「クールジャパン」としての率直な感想なのです。

七六年間も「平和」を保つてこられた東アジア唯一の先進国に生まれ育つて、兵役もなく安眠できるのがあたりまえと思つて暮らしていられる。こんな事情がいつまで

も続くのなら、自分も高齢者になったらニッポンで暮らしたいと、ドイツの人もアメリカの人も中国の人もいいます。持続可能であってほしいけれど多分むずかしいのではないかと感じているのです。

近頃はコンビニにもスーパーにもファミレスにも高齢者の姿が増えています。ご存知のように六五歳以上の高齢者が人口に占める割合を「高齢化率」といいますが、わが国の比率は二九・一％（三六四〇万人、二〇二一年九月・総務省）に達してなお世界最速で高まりつづけているのです。「古希」までたどりついたみなさんは、「高齢者社会」で暮らしていることは納得できても、新たな「高齢化社会」の実現にむかって暮らしているという実感が無いというのが、率直な反応でしょう。

* 「高齢化率」でみる国際比較

「高齢化率」という国際的基準で見たわが国の「高齢化」のプロセスを整理して見てみましょう。

* 「高齢化社会」 高齢化率が七％～一四％ 日本は一九七〇年（昭和四五年）～一九九四年（平成六年） 二四年間。高齢者が目立ってきててもまだⅡ（アルファ）で時代をつくった功労者として温存される。

* 「高齢社会」 高齢化率が一四％～二一％ 日本は一九九四年（平成六年）～二

〇〇七年（平成一九年）一三年間。増えた高齢者が高齢者意識をもってみずから「モノ」「サービス」「居場所」など高齢期に暮らしやすい「しくみ」をつくる時期。わが国はこの間の社会参加の延滞が際立ちます。

* 「超高齢社会」 高齢化率が二一%、日本は二〇〇七年（平成一九年）

わが国は「高齢化社会」と「高齢社会」の時期を合わせてもわずか三七年で経過してきました。ここからは「超高齢社会」であり、国民が参加して新しい社会を構想し、本格的な「社会の高齢化」に取り組むこととなります。この事業が欠落しているのです、

* 「人口の四人にひとりに」 高齢化率二五%、日本は二〇一三年（平成二五年）
その後も増えつづけていまや二九%に。

わが国は世界トップで高齢者が人口の四分の一のボリュームを得て（二位のイタリ
アが二三・六%）、新しく第三の現役である「高年世代」が登場しているのです。「青
少年世代」（成長期）・「中年世代」（成熟期）とともに「高年世代」（円熟期）という三
世代の現役参加による「三世代平等長寿社会」の創出へと進んでいきます。その「高
年世代」の中心にいるのが「平和団塊」のみなさんなのです。

こういう「高齢化社会↓高齢社会↓超高齢社会↓長寿社会」構想がそれぞれの段階
で国民に広く理解されて、新世紀の新しい社会を形成する意識が醸成されながら対応

できていれば、それは新世紀の国際的先行事例になったでしょう。が、さまざまな事情でそういう経緯をもたなかったのは、なにより世界初であるという事情のせいでしょう。リードする政治家の構想力の不在を嘆いてもいたしかたありません。

クールジャパン「和風」の実景

歴史的にみると、わが国は暮らし方でも文化でも海外からさまざまな優れたものを受け入れて、この国の風土に馴染ませて（和風）、この国で暮らすみんなの人生を等しく豊かにしてきました。これは国境を接するヨーロッパ諸国とは大いに異なって、極東の島国からその「和風」化した成果を海外に発出するなどということは、ほとんど経験したことがなかったといっているのです。

ここで「歴史的正午」というのは、それらの優れた舶来物を大事に蓄積して鉱脈（もちろんゴールドもシルバーもプラチナもあります）としてきた宝島・ジパングから、いままさにさまざまな成果物を、外来の人びとが発見して海外に発出する時がきているということなのです。

外国からきた人びとから「クールジャパン」と騒がれても、一般庶民までがそんな国際化を意識して暮らすなどということはこれまできなかつたことです。急に対応ができることはありません。庶民の暮らし方のあれこれが国際的な注目を受けて

いるなどといわれたら、これまでと変わりなく静かに暮らすことなどできなくなってしまいます。

何も意識しないで暮らしている国民が圧倒的であるなかで、いったい何が国際的な注目を浴びているのかというと、実はとくに際立つものではないようなのです。

たとえば、高齢者が急速に多くなっているにもかかわらず、暮らしへの支援が全国各地でも同様に行なわれていることが、外国からみると驚きであり関心のマトなのです。

そういうところに国際的ライトが当たっているというのが、「歴史的正午の陽射し」の実態であり、「クールジャパン」の実景なのです。

*コロナ禍後の自治体の対応

どこでもふつうに見られるふつうの生活感性をもつ高齢者の暮らしぶりやそのためのさまざまな「モノ・サービス」（これが安定して成熟したものにみえる）や、異なった知識や技術や経験をもつ人びとが集って助け合う「和の絆」の情景、そして地域ごとの「包括支援センター」の活動や高齢者同士の「互助の支え合い」など、どれもがすでに身の周りにあるもので、実感としてはむしろ不足ぎみや延滞ぎみである日常的な事例なのです。

たとえば、モノ（日用品）についてはどうでしょう。

世界中から生鮮野菜がやってきていますし、アジア途上国産のニッポン・ブランドの百貨商品が品不足を起こさずに安く流通していることも驚きのようですが、同じ用途の優良日用品（Older Person's Goods OPG）があつて、さらに生活を豊かにしている伝統地産品が全国展開をしていること、これが途上国の人びとからみると超がつく驚きなのです。

また「居場所」については、気軽に通えるカフェや通い場所はそう多くありませんが、随所に高齢者の笑い声（とくに女性）が絶えない「集い場所」（井戸端会議）は見受けられますし、日ごろからの「互助の支え合い」、とくに民生委員の活動は国際的にみてすぐにはマネができそうにないレベルのもののようなようです。

外国からの人が自分の目でみて、こんな驚きを率直に話したら、日本の高齢者からは、「見方が浅いですね。地域には知識・技術をもっている高齢の人材がいるのに活かされていないし、元気な高齢者は活動に前向きなのに社会の風潮は参加を求めない逆風が実態なのです」といった答えがかえってきたといえます。

平和国家ニッポンの先進的「高齢化」の検証にやってくる途上諸国の人びとは、自国の現状からみて、わが国の高齢者は無視や軽視ではなく善意からの「温存」として扱われていると評価します。いまさらながら宝島・ジパングの豊かさに憧憬の思いを

深くするのです。

しかし長く滞在している外国の人はその将来の危うさに気づいているのです。もちろん地域の人びとはそれに気づいていましたし、コロナ禍のあと地域住民の「命と暮らし」を守るのは国よりも自治体であることが知られましたから、全員参加の「世代交流」による「地域共生社会」の創出を急遽横比べで進めているのです。

平和の一〇〇年・一〇〇年の人生

すでに繰り返して述べてきたところですが、一〇〇年人生をつつがなく暮らすためには、「生活圏」のさまざまなしくみの「高齢化」が必要です。高齢者からの提案を構想とし高齢者が自在に利用できるしくみをつくるのは政治の側のしごとです。そのためには優れたリーダーシップがなければ実現できません。

わがこととして高齢者が利用できるしくみをつくること。

そのためには、「高齢化対策」事業を策定する、政・官・産・学・民による衆知をあつめた構想（グラウンドデザイン）を検討する会議が必要です。霞が関の現役官僚の判断にまかせられる事業ではないのです。まず前記の有識者会議が具体化して提案し、公開して高齢者層を巻き込んで実現をめざすこととなります。それを推進するのは引退した長老も含む政治の側の役割です。国の平和一〇〇年を守り 国民の一〇〇年人

生を支えるのは政治の側の役割です。にわとりと卵の先後議論はありません。

何よりもまず政治の側が動くこと。国民の意見を集約して、衆参両院で議論を尽くして、「日本長寿社会グランドデザイン構想（案）」を提示。それをさらに衆議して国民に訴えかけるといふことが不断に行われなければ、史上初で国際的モデルとして注目されている「平和の一〇〇年・一〇〇年の人生」を支える三世代平等長寿社会は進展せず渋滞してしまうのです。

＊「長寿社会構想」を掲げる

高齢化は一過性のもので、少子化は恒常的なもの」とする施策は、この国の将来を二重に誤ることになります。「高齢化は恒常的なもの、少子化は一過性のもので」とする対策が必要なのです。このまま推移すれば、二一世紀初頭の首相と担当大臣は全員が、政策判断を誤りつづけた責任者として歴史的責任を負うことになるでしょう。とくに担当大臣であった人びとすべての責任において。

「高齢者のみなさんとともに日本長寿社会グランドデザインを掲げよう！」

と呼びかける担当大臣はだれなのか。

その登場は今世紀の「高齢化」問題を検証してきた本稿から政治の側への渾身の訴えです。これを推進する旗振りリーダーの登場がかならずあるはずですよ。

国際的に注目されている「日本高齢社会」創出への新たな烽火を掲げるべきときであり、時は切迫しているのです。頼り甲斐がある高齢社会対策担当大臣（専任）が内閣府にどっしりと構えているようであれば改革は始まらないのです。

野田佳彦内閣が二〇一二年九月に改定してから五年、「高齢社会対策大綱」は安倍内閣で検討されましたが、ここに記すほどのことはありません。

まずは三六〇〇万人の高齢者に参加を呼びかける旗印としての芯となる「高齢社会対策大綱」を、みなさんの代表や本稿で取り上げた将来構想をお持ちの方々を交えて議論して、

「高齢社会Ⅱ三世代平等長寿社会」の新しい姿、公開することができるグランドデザイン構想を示して、「一億総参加」の新しい社会の創出に努めねばならないのです。

憲法論議で「国際平和」のための議論を尽くすこと、それとともに、「日本長寿社会グランドデザイン」構想を合わせて国際的に発信すること。どこにも例のない「一〇〇年平和・一〇〇年人生」の証としての「先進的高齢社会」をどう成し遂げるか。そこにいたるプロセスは、「戦後っ子」世代のみなさんに歴史的使命として託されています。それは高齢化途上国のアジア地域のみならず世界規模で注目されているところす。

それに応えるには、まずは「高齢社会対策基本法」制定二五年を機会に、経緯をか

えりみて、だれもが理解できて納得できて参加できる「日本長寿社会ブランドデザイン」を衆議して公開し、国際的に発信することでしょう。

、「立てんかな、平和一〇〇年・一〇〇年人生の国際旗を！」

そうすべき時期であり、これが「歴史的正午」の陽射しを意識することの証なので

Ⅱ 「平和団塊」の人びとの横顔

核芯にいる長寿社会担当大臣

世紀初めに世界初出として形成される「日本高齢社会」、その事業の国の責任者として核芯にるのが内閣府の長寿社会（高齢社会）対策担当大臣、あなたです。

一九九六年以来、毎年閣議決定（持ち回りが多い）され公刊されている『高齢社会白書』（内閣府刊行）の閣議への提出者です。

その担当大臣が最近では小淵優子、福島みずほ、蓮舫、小宮山洋子、森まさこ、有村治子という女性大臣が閣議決定時での担当となっています。連ねてみると明らかかなように、「少子化・高齢化」を合わせて担当する併任人事であり、それも「少子化対策」が主であったことが知られます。

あの大震災があった二〇一一年、野田佳彦民主党政権の「高齢社会対策担当大臣」

が「少子化」と併任の蓮舫議員だったことを、どれほどの人が知っていたでしょうか。蓮舫大臣のもとで、一〇月に有識者検討会（座長清家篤慶応義塾大学塾長）を立ち上げて、報告書を作成、その後、内閣官僚の検討を経て、翌年の二〇一二年九月七日に閣議決定をしました（このときは中川正春担当大臣）。変化を期待した民主党政権も素通りしただけでした。

まことに残念なことですが、「高齢化」が国際的潮流だというのに、政界の世代交代の嵐のなかで登場してきた小泉チルドレンや小沢ガールズを中心とする若き国会議員の多くが高齢者の実人生に理解が及ばず、高齢社会担当大臣がだれかすらも知らず、専任大臣がないというのが実情だったのです。

内閣府内部の扱いも「共生社会政策」の一分野として、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が担当しています。「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員がいるにはいますが、兼務だったりしますから、「高齢社会対策」を担う太い導線が内閣府内に整っているとはいえません。内閣府内の主要な職務として扱われなくなってしまうのは久しいのです。これは政治家の構想不在の連鎖とっていいプロセスなのです。

「平和団塊」のみなさんの横顔

再三度、引用しますが、「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して

暮らすことのできる社会」の形成をめざす（一九九五年に制定された「高齢社会対策基本法」の前文）という文言は、みなさんは当時働きざかりの五〇代のころでしたから、知ったとしても実感はなかったでしょう。七〇代になって納得のいく文言として率直に理解されていると思います。

ですからわが国の高齢者は、国際社会に対して平和を訴える「憲法第九条」と、長寿社会をめざして社会改革をすすめる「高齢社会対策基本法」というふたつの旗印を先人から引き継いで共有しているのです。その歴史的事業の担い手が、「戦後平和団塊」のみなさんなのです。国際的な期待を受けて、「七〇古希」をスタートとして一〇〇歳をめざしながら歴史舞台の中央でライトを浴びているのです。ライトを浴びて自在に人生を遊戯する「平和団塊」のみなさんに本稿は熱い声援を送っているのです。

「ニッポン発二一世紀オリジナル」の平和一〇〇年・一〇〇年人生の歴史的ステージの主役をつとめる「平和団塊」のみなさんの横顔を、ほんのちよつとだけ紹介しておきたい。

だれもが等しく貧しかった戦後に生まれて育った子どもころの記憶を共有している人びとです。そこからそれぞれに個性的な人生をつくりあげ、熟成期をすごしている「平和団塊の世代」（日本の戦後っ子の代表）のみなさん。あらためて無事にこの約九七〇万人の一人ひとり、敗戦後のきびしい生活環境の中で育ててくれたご両親の

「思い」を思い起こして、新世紀の国際平和を体現する「平和団塊の世代」とのみなさん。「団塊世代」では即物的にすぎて、また「平和世代」では理念的にすぎて、いずれもご不満かもしれません、あわせて「平和団塊の世代」のみなさんと呼ぶのをお許し願います。

*** 「平和の一〇〇年・二〇〇年の人生」を生きる**

いかがですか、个性的で頼り甲斐のあるお仲間のみなさんでしょう。

世界大戦の当事国となった先進諸国の戦後には同じ経歴のベビーブーマーの人びとがいます。その人びととともに、わが国の「平和団塊の世代」が、この国で穏やかに安心して高齢期をすごせる社会をみずからの力で形成し、長寿を全うすること。それが「平和に生きる」ことの証にちがいありません。それはまた次の世代へ、途上諸国へ持続可能な姿で伝わることになるでしょう。一人ひとりが世紀をまたいで長寿を体現する。こんな役回りは願って求めても得られるものではありません。

十年ほど前から新聞・TVなどから勝手に選ばせていただいた方々ですが、どうか掲載をお恕し願いたい。そしてみなさんご自分のお立場で身近なおなかまを自在に加えてください。

*一九四六（昭和二一）年生まれ・七五歳に。

仙谷由人（政治家・没） 鳳蘭（俳優） 松本健一（作家） 宇崎竜童（歌手） 吉田拓郎（歌手） 美川憲一（歌手） 北山修（歌手） 新藤宗幸（政治学） 柏木博（デザイン） 岡林信康（歌手） 堺正章（TVタレント） 坂東真理子（官僚） 田淵幸一（プロ野球） 菅直人（政治家） 秋山仁（数学教育） 藤森照信（建築史） 猪瀬直樹（作家） 倍賞美津子（俳優）・・

*一九四七（昭和二二）年生まれ・丙戌・七四歳に。

橋本大二郎（政治家） 衣笠祥雄（野球評論） ビートたけし（TVタレント） 高田純次（タレント） **星野仙一**（プロ野球） 尾崎将司（プロゴルフ） 西郷輝彦（歌手） 鳩山由起夫（政治家） 津島佑子（作家） 千昌夫（歌手） 上原まり（琵琶奏者） 荒俣宏（作家） 中原誠（将棋棋士） 小田和正（歌手） 北方謙三（作家） 金井美恵子（作家） 西田敏行（俳優） 森進一（歌手） 池田理代子（漫画家） 布施明（歌手）・・

*一九四八（昭和二三）年生まれ・丁亥・七三歳に。

高橋三千綱（作家） 輪島大士（大相撲） 毛利衛（宇宙飛行士） 里中満智子（漫画家） 赤川次郎（作家） 五木ひろし（歌手） 赤松広隆（政治家） 江夏豊（プロ野球） 都倉俊一（作曲家） 沢田研二（歌手） 上野千鶴子（女性学） 井上陽

水（歌手） 鳩山邦夫（政治家） 橋爪大三郎（社会学） 糸井重里（コピーライター） 由起さおり（歌手） 舛添要一（都知事） 谷村新司（歌手） 内田光子（ピアニスト）・・

*一九四九（昭和二四）年生まれ・戊子・七二歳に。

村上春樹（作家） 鴨下一郎（政治家） 林望（国文学） 海江田万里（政治家） 高橋真梨子（歌手） 平野博文（政治家） 武田鉄矢（歌手） 高橋伴明（映画監督） 萩尾望都（漫画家） ガッツ石松（ボクシング） 矢沢栄吉（歌手） 佐藤陽子（バイオリニスト） 堀内孝雄（歌手） 松崎しげる（歌手） 森田健作（政治家） テリー伊藤（演出家）・・

*一九五〇（昭和二五）年生まれ・己丑・七一歳に。

残間里江子（プロデューサー） 館ひろし（俳優） 和田アキ子（歌手） 坂東玉三郎（歌舞伎俳優） 東尾修（プロ野球） 中沢新一（宗教学者） 池上彰（ジャーナリスト） 姜尚中（政治学者） 八代亜紀（歌手） 辺見マリ（俳優） 塩崎恭久（政治家） 梅沢富士男（俳優） 岩合光昭（写真家） 綾小路きみまろ（漫談家） 神田正輝（俳優）・・赤字は亡くなった人びと。

「三世代平等社会」へのプロセス

世界初の「高年世代」を形成して、「青少年」「中年」「高年」の三期の「現役世代」がそれぞれに活動しながらバランスのよい「三世代平等社会」を達成する。それが二一世紀の国際標準になるでしょう。「平和国家」日本はそのさきがけを託されているのです。「高齢化先行国」であるとともに「高齢化先進国」であること。

世界初の「長寿社会」三世代平等社会を創出する事業は、一九九五年一月に「高齢社会対策基本法」を制定してまずまずのスタートを切ったのでした。眉雪の持ち主である村山富市さんの内閣のときでした。

「高齢化」事業は、「高齢者対策」では完熟とっていい成果を達成してきましたが、一方の「高齢社会対策」はよくて半熟という状態にあります。「日本高齢社会」創出の事業は、世界で初めての事業であるゆえに、二〇年の準備期間を要したと現実を前向きに理解すべきなのでしょう。世界最速で「高齢化率」が二五%（二〇一三年）に到達して人口の四人にひとりというボリュームになるのを待って、

「四人にひとり型の高齢社会」長寿社会」

を国家事業として本格的な実現にはいったというふうに考えれば、だれも責められずに済んでいいのではないか。実際に国際的にはそういう事情にあるのですから。

もうひとつたいへん説得力のある理由があるのです。

それは戦後生まれの「平和団塊の世代」の約九七〇万人のアクティブ・シニアの高齢者加入を待って本格的にという特別な事情です。一九九九年の「国際高齢者年」のあと、この国の高齢化対策のありようをつぶさに観察・検証してきた本稿は、団塊の世代」がみずから高齢者であることに納得できる「古希期」(七一歳〜)六五歳を迎えるとき、老後をすこす安心した社会がつけられるだろうと予測してきました。

今からなら国際的な成功事例(二〇二五年問題への対応も)をつくることは可能です。高齢者層が何もしないでこのまますこせば、残念ながら国際的な失敗先例となることを露呈することになるでしょう。

この国で暮らす高齢者一人ひとりの意識的自立的な活動によって成立する「日本高齢社会」(本稿の「三世代平等社会」)の総体的な将来の姿を、個人が推察するのはむずかしいですが、「日本長寿社会ブランドデザイン」を旗印として掲げて達成にむかう先には、歴史的正午の光のなかに晴れやかな未来の姿が見えているでしょう。

*すべての世代が参加して

東京オリンピック・パラリンピックの開催をまたいで二〇二五年ころ、内輪な推測としては、自治体を中軸にしての高齢者層の意識的で自立的な活動(生産・消費・社会活動)によって、次のようなことのうちのいくつかが達成にむかっていると

思われます。どれも行く先が明るい展望です。

*女性と若者による成長力経済「アベノミクス」が停滞期に達して、高齢者の成熟力＋円熟力によるモノ・サービスを中心にした高齢化経済「エイジノミクス」が各地各界に登場して、日本経済をデフレーション（萎縮）から救済するでしょう。

*「超一〇〇兆円」の財政赤字の解消つまりプライマリーバランスは、持続可能な高齢化経済の推進によって大幅な赤字縮小に向かうでしょう。「新三本の矢」の六〇〇兆円は、高齢化経済があつてこそクリア可能なハードルの高さです。

*「超一四〇兆円」といわれる家計黒字は「三世代平等社会」形成のための出資にむかうでしょう。家計支出から国家財政（税金）への資金の流れは新たな高齢化事業が呼び覚ますもの。

*アジア唯一の「先進的政治・経済・文化国」として途上国が範とする日本でありつづけるでしょう。もちろん一〇倍の人口をもつ中国・インドといった途上大国も含めてです。

*高齢世代の次世代支援により、「少子化」に歯止めをかけ、「新三本の矢」の出生率一・八を回復し、しごとと子育てで多忙な女性に多様性のある生きがいを与え、脱M字型の就労ができるようになるでしょう。

* 高齢者参加による自助・互助によって「介護離職ゼロ」を実現。高齢期をだれもが敬意をうけて安心して暮らせる「長寿社会」をもたらすでしょう。

* 「好専門を出でず、悪事千里を行く」という世相の悪化を防止できるでしょう。

* 世界がモデル事例とする「日本長寿社会（三世代平等社会）」が各地各界にわたって姿をみせているでしょう。

* 数多くの国際機関・会議・大会を国内に招請し、常態として各種の国際イベントが行なわれ、世界中からだれもが一生に一度は訪れたい、できれば春夏秋冬四度は訪れたい国としてやってくるでしょう。

そういう国が可能であり、それを成し遂げることで、のちの歴史書は誇らかにこう書き記すでしょう。

「二一世紀初頭の日本は、先進的経済国としてアジアの近代化（モノの豊かさの共有）に貢献しました。また二〇世紀の世界大戦ののちに国際平和の証として灯した「平和憲法」の明かりを一〇〇年護持して「日本国憲法制定一〇〇年記念式典」を国際的オベイションのもとで開催し、二一世紀の国際平和の礎をつくりました。と同時に世界に先駆けて「三世代平等型の長寿社会」を実現しました。さらに地域においては「地域包括支援センター（健康）」「シルバー人材センター（就労）」「生涯学習センター（知

識・技術習得)の三センターによる高齢化対応で、地域社会の活性化に成果を残しました。これらの事業は、アジア後進諸国にとってのモデル事例を提供し、国際平和と地域民主主義に寄与しました。」と。

地域ごとの泉眼から滋養を得て発出して新しく生じた高齢者層である平和団塊世代は、企業内では「成熟商品」をこしらえ、地域では「共生社会」をこしらえました。これは二つとも高齢化後進国のモデル事例となるものであり、世紀を通じた国際潮流になるでしょう。

Ⅲ ささまざまな高齢社会構想

公的団体としての事業

*「環境未来都市」と「環境モデル都市」(内閣府)

世界的に進む都市化を見据え、持続可能な経済社会システムを実現する都市・地域づくりをめざす「環境未来都市」構想を内閣府が進めています。

「環境モデル都市」は、持続可能な低炭素社会の実現に向け高い目標を掲げて先駆的な取組にチャレンジする都市で、目指すべき低炭素社会の姿を具体的に示し、「環境未来都市」構想の基盤を支えています。

「環境未来都市」は、環境や高齢化など人類共通の課題に対応し、環境、社会、経済の三つの価値を創造することで「誰もが暮らしたいまち」「誰もが活力あるまち」の実現を目指す、先導的プロジェクトに取り組んでいる都市・地域。

これらの「環境モデル都市」と「環境未来都市」を一体的に推進することで、「環境未来都市」構想の理想とする都市・地域の早期実現を目指しています。

「未来都市構想」は「環境未来都市」11都市と「環境モデル都市」23都市がセット。「環境モデル都市」が二〇〇八年、「環境未来都市」が二〇一一年にスタートしました。

「環境未来都市」は一一都市のうち六都市が被災地から、五都市が被災地以外から。「未来都市構想」のビジョンには柱が三つある。第一が高齢化社会対応、二つ目が景観環境問題、三つ目がグリーン・イノベーション。みな都市単位で選ばれている。内閣府地方創生推進室が担当している。

「環境未来都市」一一都市

- ・北海道下川町 集住化モデル 森林バイオマスとともに新たな地域モデルを構築
- ・柏市 トータルヘルスケア・ステーション 人とまちがともに成熟する未来へ
- ・横浜市多摩プラザー 若い人と高齢者が交わって住む 一歩先を行く環境の中で市民が安心して暮らすために

・富山市 中心市街地活性化で高齢者優遇 公共交通で暮らせるコンパクトな街に
・北九州市 健康づくり生きがいづくり 公害を乗り越えた市民力が、アジアでの可能性をひらく

・気仙広域被災地（大船渡市・陸前高田市・住田町） 医療・介護・福祉の連携先進モデル 歴史的つながりを軸に二市一町で復興へ向かう

・釜石市被災地 被災地

・宮城県岩沼市 被災地 住民の思いを新しいまちの土台に

・宮城県東松山市 被災地 創造的な未来へ向かう東松島

・福島県南相馬市 被災地 希望の光輝く未来の故郷を創る

・福島県新地町 被災地

「環境モデル都市」二三都市

・下川町 人が輝く森林未来都市しかもかわ

・帯広市 田園環境モデル都市・おびひろ

・つくば市 つくば環境スタイル“SMILE” みんなの知恵とテクノロジーで笑顔になるまち

・千代田区 かけがえのない地球環境をみんなで守るまち 千代田

・横浜市 環境未来都市・横浜くひと・もの・ことがつながり、うごき、時代に先駆

ける価値を生み出す「みなと」)

・新潟市 「田園型環境都市にいがた」→地域が育む豊かな価値が循環するまち

・富山市 コンパクトシティ戦略による富山型都市経営の構築→ソーシャルキャピタルあふれる持続可能な付加価値創造都市をめざして

・飯田市 市民参加による自然エネルギー導入、低炭素街づくり

・御嵩町 活力ある環境にやさしいまち「みたけ」→地域資源を活かした低炭素コミュニティの実現を目指して

・豊田市 「ミライのフツー」を目指す、環境先進都市とよた

・京都市 DO YOU KYOTO? (環境にいいことしていますか?)を合言葉に、京都から世界へエコ活動を広げていきましょう!

・堺市 「快適な暮らし」と「まちの賑わい」が持続する低炭素都市「クールシティ・堺」の実現

・尼崎市 「ECO未来都市あまがさき」へのチャレンジ

・神戸市 人に、自然に、地球に、未来に貢献する「環境貢献都市KOBÉ」―エネルギーのベストミックスとともに、みどりあふれる、生活を楽しむ都市をめざして―

・西粟倉村 限りある自然の恵みを大切な人と分かち合う

・松山市 環境と経済の両立を目指して「誇れる環境モデル都市まつやま」

- ・ 梶原町 木質バイオマス地域循環モデル事業
 - ・ 北九州市 北九州市環境未来都市
 - ・ 水俣市 人が行きかい、ぬくもりと活力ある「環境モデル都市みなまた」
 - ・ 宮古島市 島嶼型低炭素社会システム「エコアイランド宮古島」
 - ・ 小国町 地熱とバイオマスを活かした農林業タウン構想「ゼロカーボンのまちを指して」
 - ・ ニセコ町 国際環境リゾート都市・ニセコス마트チャレンジ86
 - ・ 生駒市 日本一環境に優しく住みやすいまち「いこま」
- 「市民・事業者・行政の協創」で築く低炭素“循環”型住宅都市

民間活動の現場からの報告

*「高齢社会領域一五プロジェクト」(RISTEX)

RISTEX(科学技術振興機構)の「高齢社会領域」が平成二二～二四年におこなった一五プロジェクトです。領域担当は秋山弘子(東京大学高齢社会総合研究機構特任教授)。

高齢社会領域について。研究開発領域の目標。

(1) 高齢社会に関わる問題について、地域やコミュニティの現場の現状と問題を科

学的根拠に基づき分析・把握・予測し、広く社会の関与者の協働による研究体制のもとに、フィールドにおける実践的研究を実施し、その解決に資する新しい成果（プロトタイプ）を創出します。

(2) 高齢社会に関わる問題の解決に資する研究開発の新しい手法や、地域やコミュニティの現場の現状と問題を科学的に評価するための指標等を、学際的・職際の知見・手法に基づき体系化し提示するための成果を創出します。

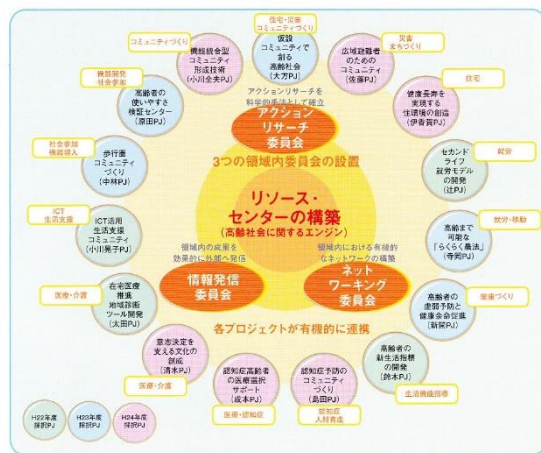
(3) 本領域の研究開発活動を、我が国における研究開発拠点の構築と関与者間のネットワーク形成につなげ、得られた様々な成果が、継続的な取り組みや、国内外の他地域へ展開されることの原動力となること、また多世代にわたり理解を広く促すことにつなげます。

平成二二年に四、平成二三年に五、平成二四年に六の三年間で15プロジェクトを採択。

・一五プロジェクトについて 数字は採択平成年 敬称略

・22 「新たな高齢者の健康特性に配慮した生活指標の開発」

鈴木隆雄



- ・ 22 「在宅医療を推進する地域診断標準ツールの開発」 太田秀樹
 - ・ 22 「ICTを活用した生活支援型コミュニティづくり」 小川晃子
 - ・ 22 「セカンドライフの就労モデル開発研究」 辻哲夫
 - ・ 23 「社会資本の活性化を先導する歩行圏コミュニティづくり」 中林美奈子
 - ・ 23 「仮設コミュニティ」で創る新しい高齢社会のデザイン」 大方潤一郎
 - ・ 23 「高齢者の虚弱化を予防し健康余命を延伸する社会システムの開発」 新開庄
- 11
- ・ 23 「高齢者の営農を支える「らくらく農法」の開発」 寺岡伸悟
 - ・ 23 「高齢者による使いやすさ検証実践センターの開発」 原田悦子
 - ・ 24 「高齢者ケアにおける意思決定を支える文化の創成」 清水哲郎
 - ・ 24 「認知症高齢者の医療選択をサポートするシステムの開発」 成本迅
 - ・ 24 「認知症予防のためのコミュニティの創出と効果検証」 島田裕之
 - ・ 24 「健康長寿を実現する住まいとコミュニティの創造」 伊香賀俊治
 - ・ 24 「広域避難者による多居住・分散型ネットワーク・コミュニティの形成」 佐藤滋
 - ・ 24 「二〇三〇年代をみすえた機能統合型コミュニティ形成技術」 小川全夫

*「プラチナ大賞」(プラチナ構想ネットワーク)

プラチナ構想ネットワークによる「プラチナ大賞」。未来のあるべき社会像として描く「プラチナ社会」は、成熟社会における成長の一つのモデルであり、日本が先進国として直面する課題の解決と、新たな可能性の創造によってもたらされる、豊かで快適でプラチナのように威厳をもって光り輝く社会です。会長は小宮山宏元東京大学学長・三菱総研理事長。ここでは初期の活動を紹介します。

「プラチナ社会」の必要条件。

- ・エコロジード(人間にとって快適な自然環境の再構築、環境との調和・共存)
- ・資源の心配がなく(エネルギー効率の向上、自然エネルギー活用、物質循環システムの構築)

- ・老若男女が全員参加し(生涯を通じた成長、社会参加の機会創造、健康で安心して加齢できる社会)

- ・心もモノも豊かで(文化・芸術に彩られた暮らし、飽和・停滞を打破する「限界を超えた成長」)

- ・雇用がある社会(イノベーションによる新産業の創出)

プラチナ大賞運営委員会(プラチナ構想ネットワーク)

審査委員会 敬称略

委員長 吉川弘之 副委員長 吉川洋 委員 秋山弘子 西條都夫 増田寛也 松永真理 箕輪幸人

◎第一回プラチナ大賞 平成二五年七月二五日 最終審査発表会 都市センターホテル

団体名 取り組み名

1 香川県 特別賞 かがわ遠隔医療ネットワーク「K-MIX」を活かした遠隔・在宅医療の推進

2 雲南市 特別賞 小規模多機能自治による持続可能型“絆”社会の構築

3 上勝町 優秀賞 ゼロ・ウェイスト政策から考えるサニテーションシステム

4 柏市 特別賞 柏市における長寿社会のまちづくり

5 海士町 大賞 総務大臣賞 魅力ある学校づくり×持続可能な島づくり×島前高校魅力化プロジェクトの挑戦

6 東松島市 プラチナ・イノベーション賞 東松島式震災ごみリサイクル（東松島方式震災がれき処理）

7 富山市 優秀賞 コンパクトシティ戦略による富山型都市経営の構築×ソーシャルキャピタルあふれる持続可能な付加価値創造都市を目指して

8 徳島県 優秀賞 とくしまサテライトオフィスプロジェクト×地域再生のための

新たな戦略」

9 最上町 プラチナ・イノベーション賞 サステイナブルタウン最上「木質バイオマスエネルギーが地域産業を興す」

(一二四件のエントリーから)

◎第二回プラチナ大賞 平成二六年七月二二日 最終審査発表会 都市センターホテル

1 ヤマトホールディングス株式会社 大賞 総務大臣賞 地域に密着したヤマト流CSV(まごころ宅急便)

2 自治医科大学 優秀賞 スマートヘルスケアシティ 天草から始まる安心安全で豊かに成長する街づくり

3 埼玉県 審査委員特別賞 世界に羽ばたくグローバル人材の育成

4 流山市 審査委員特別賞 流山市における真のコアコンピタンス経営「公共施設マネジメントにおける挑戦」

5 東日本旅客鉄道株式会社 審査委員特別賞 「COTTONIOR(コトニア)吉祥寺」子どもたちとシニア世代の交流

6 横浜市、東京急行電鉄株式会社 審査委員特別賞 「次世代郊外まちづくり」郊外住宅地の再生モデルの構築

7 下市町 優秀賞 「らくらく」で、プラス10年イキイキ元気！ 働く老若男女が笑顔で集う町 下市町

8 香川県 審査委員特別賞 世界をリードする香川の希少糖

9 豊田市 優秀賞 「自立×つながり」でシニア世代を地域の担い手に！「ミライのフツー」な自治モデル

10 北九州市 大賞 経済産業大臣賞 都市間連

しているのではないかと携を通じたアジアのグリーンシティ創造

(五八件のエントリーから)

◎ 第三回プラチナ大賞 平成二七年一〇月二三日 最終審査発表会 イイノホール

大賞 総務大臣賞

珠洲市(石川県)『能登半島最先端の過疎地域イノベーション』く真の大学連携が過疎地を変える！く

大賞 経済産業大臣賞

積水ハウス株式会社『5本の樹』で命あふれる笑顔のまちを

優秀賞

ニセコ町(北海道)「住民自ら考え行動する」住民自治によるまちづくり

豊岡市(兵庫県)豊岡の挑戦 く小さな世界都市の実現に向けてく

熊本県日本、そしてアジアをリードする認知症対策の推進！！

荒川区（東京都）子どもの居場所づくり事業　子どもの未来を守る　荒川区の子ども
の貧困・社会排除問題への取組

株式会社イトーキ働きながらカラダとココロの健康づくり　workise(ワークサイズ)

川崎市・横浜市（神奈川県）横浜市と川崎市との待機児童対策の連携協定

香川県かがわの里海づくり　自然共生型の新しい社会とライフスタイルを目指して

高知市（高知県）こうちこどもファンド　子どもたちの『やってみたい！』を応援
します

◎第四回プラチナ大賞　平成二八年一〇月二六日　最終審査発表会　イイノホール

大賞　総務大臣賞

雲南市（島根県）幸雲南塾（大人版）　若者チャレンジによる持続可能なまちづくり
への挑戦

大賞　経済産業大臣賞

コマツ石川県石川県森林組合連合会（石川県）地産地消型バイオマス利活用の推進と
地方創生

優秀賞

新潟市（新潟県）「新潟発 わくわく教育ファーム」の推進

子どもたちに「生きる力」を育み、生産者とともに歩む大農業都市の更なる発展へ

（株）ウエルシイ（株）三菱ケミカルホールディングス地下水を飲料化する自立分散型給水システム

「地下水膜ろ過システム」による国内外の持続可能なまちづくりへの貢献

養父市（兵庫県）養父市が拓く中山間地の未来

過疎地域から日本を変える！

久山町（福岡県）健康を柱とした安心・元気な「健康が薫る郷」のまちづくり

久山町健診事業・久山町研究

西之表市・中種子町・南種子町（鹿児島県）産学公連携による学びの島で夢づくり、

生きがいづくり「自然と共生するスマートエコアイランド種子島」構想の実現に向けて

浜松市（静岡県）地域資源を活用した「地産地消」・「地産外商」による地方創生

〜 This is HAMAMATSU Style〜

（株）正興電機製作所 正興電機製作所グループ 健康経営の取組み

みやま市（福岡県）エネルギーとしあわせの見えるまちづくり

スマートコミュニティみやまの実現

* 「高連協高齢者憲章」(高齢社会NGO連携協議会)

国連は平和裏での「高齢化社会」が新世紀の国際的潮流となることを予測して、一九九〇年に一〇月一日を「国際高齢者の日」とすること、一九九一年に「高齢者五原則」(自立・参加・ケア・自己実現・尊厳)を提唱し、一九九二年に一九九九年を「国際高齢者年(International Year of Old Persons)」と定め、一九九五年にテーマを「すべての世代のための社会をめざして」とし、「国際高齢者年」の活動を一九九八年一〇月一日から開始するよう要請しました。

わが国でも高齢化がすすみ、一九九四年には高齢化率が一四%を超えて「高齢社会」にはいり、一九九五年には「高齢社会対策基本法」を制定し、一九九六には「高齢社会対策大綱」を閣議決定しました。国連の提唱に共鳴する関連団体が、「国際高齢者年」を前にした一九九八年一〇月に「高齢者年NGO連絡協議会」(代表・堀田力さわやか福祉財団理事長)を設立、一九九九年の「国際高齢者年」事業の民間団体の中心として活動、その後名称を「高齢社会NGO連携協議会」(高連協)と改めて発足しました。

参加団体は社団・財団・NPO、協同組合等のNGO(非政府機関・団体)を正会員とする連合組織。なお二〇一〇年度に新設された「個人会員」として「オピニオン

会員」があります。代表は樋口恵子（高齢社会をよくする女性の会理事長）と堀田力（さわやか福祉財団会長）。

「高連協オピニオン調査」（対象者2,000名以上）の結果内容を基にして、

・「社会保障制度改革への提言“総ての世代が安心して暮らせる社会づくり”」（2001年）

・「高齢者（シニア）の社会参加活動に関する提言」（2004年）

・「アジアのシニアの生きがいづくり宣言」（愛知万博、2005年）

・「環境問題に取り組むシニアの行動指針（宣言）」（2006年）

・「総ての世代の人々が生きがいを持ち、心豊かに暮らせる社会の実現」（2009年）

・「高連協提言」「高齢社会対策大綱」の見直しを指示した野田総理へ高連協提言（2012・1・12・憲政記念館会議室）

「シニアの社会参加活動の推進」のための啓発事業としては、内閣府（高齢社会対策担当）との共催で、

・「高齢社会研究セミナー」：1999～2008年、毎年開催

・「高齢社会フォーラム」：2009年～2015

・「高齢化に関するグローバル・パートナーシップ・シンポジウム」：2003年・2004年

具体的なテーマによるイベントとして、

- ・「高齢者と社会保障制度の在り方」研究集会：2000年東京駿河台
- ・「経験の分かち合い集会」：2002年高齢化に関する世界会議・マドリッド
- ・「EXP02005・アジアのシニアの生きがいフォーラム」：2005年愛知万博
- ・「シニアと環境 国際シンポジウム」：2007年東京有楽町
- ・「リタイアメント再創造 (Reinventing Retirement)」：2007年AARPと共催、東京国連大学

・「シニアの環境問題取り組み」：2008年、東アジア国際シンポジウム、東京江戸川区

・その他、「成年後見制度普及（市民後見人養成）」事業、等。

* 高齢者憲章

高連協は、国連提示の「高齢者の自立、自己実現、参加、ケア、尊厳（五原則）」とともに、「高齢者の役割」も踏まえて、「すべての世代が生きがいある生活を追求できる平和な社会」、「年齢差別のない社会」の創造をめざしています。そして、この運動の基本的指針を「高齢者憲章」として、ここに提唱します。

< 提言 >

1 尊厳…個人の尊厳は他の世代の人々と同様に高齢者についても重んじられる。

2 社会参加・高齢者が生き生きと暮らすことは、すべての世代の人々が安心して暮らせる社会をつくるために不可欠である。そのためには、高齢者の能力を活用する事業や職種を社会全体で開発するなど、高齢者が意欲を持って社会参加できる機会を広げることが望まれる。

3 社会貢献・すべての世代にとって住みよい社会をつくるために、高齢者は若い世代と交流しつつ、その経験を生かして社会福祉、環境整備、コミュニティづくり、文化の伝承、国際交流などの社会貢献活動に積極的に参加する。

4 健康づくり・高齢者は、地域社会において充実感を持って生きることができるよう、自らの身体的機能の維持に努める。そのために、保健センターや健康づくりネットワークなど、地域における仕組みや環境を整備することが望まれる。

5 まちづくり・身体的能力や生活能力がいかに異なっても、安心して暮らせる社会にするために、バリアのない住宅やまちをつくることを公共事業の重要なテーマとすることが望まれる。また、すべての人々は、心のバリアを取り払い、地域社会において助け合って生きるよう努める。

6 社会保障制度・年金、医療、介護などの社会保障の制度は、国民の生涯にかかわる制度として確立され、これによりすべての世代が安心して暮らせる社会にすることが必要である。これらの制度は相互扶助の精神に立ち、負担の公平と効率的な運用の

確保に努め、社会全体の活力を失わせないように総合的に構築されなければならない。これらの制度によりサービスを受けるものは、可能で適切な範囲において、その費用の一部を負担するとともに、その自己決定権は最大限に尊重されなければならない。

7 生涯学習・高齢者の多様な生き方を支援するため、生涯にわたり学習できる仕組みの整備が望まれる。また、高齢者の経験や知恵が子供や若者の教育に活用される仕組みも、つくられなければならない。

高齢者をはじめ総ての世代の男女は、共同参画して以上の提言の達成に努める。

一九九九年九月一五日 二〇〇五年九月一五日 前文一部改訂

生涯現役活動者の立場で

すでに「日本高齢社会」形成の活動を述べてきましたが、新たな歴史をつくりつつある日本の高齢者の一人ひとりが、「三世代平等人生」を意識して暮らすことで「高年世代」が形成され、新たなモノやサービスや居場所を形成することで存在感を示すこととなります。

すでにそれに足りる人的ボリューム（四人にひとり・三六四〇万人）に達していることは周りを見、統計を見ることで確認することができますが、TVの画面や生活圏

のしくみなどからは存在を感じることができません。むしろ後退しているようにさえ思えます。社会のしくみの「高齢化」対応が人的高齢化に追いついていない証です。「青少年世代」「中年世代」そして新たに「高年世代」が参加することで、初めてオール・ジャパン「一億総活躍」体制が成立して「三世代平等社会」が実現に向かうのですが、残念なことには安倍内閣には「高年世代」の潜在力に期待し参加を呼びかけるという姿勢が見えません。

本来なら、政府の「一億総活躍国民会議」の中心にいて発言されるべき方々が、草野に置かれたままであることは、政権の側が霞が関から見える範囲での人選に終始しているためなのです。

女性と若者による経済成長に期待するあまり、成熟・円熟した人生を送っている人びとが展開している高いレベルの経済伸長の可能性が見えないのでしょうか。成熟力・円熟力は新たな経済伸力であることに思い及ばないのです。

「一億総活躍」といっているのですから、三六〇〇万人の高齢者を除外しては成り立たないはずなのに、現役官僚にもそういう認識が欠けています。霞が関からは見えていないのです。

ここではこの国の将来に確かな構想をお持ちの方々をご紹介しますことにします。耳を傾けてその発言の一端をお聴きください。それぞれに確かな将来構想をお持ちであ

るとともに、そこにいたる手立ても示しておられます。

*女性主導で「人生一〇〇年」社会を

まずは「高齢社会をよくする女性の会」の樋口恵子理事長の将来像から。

樋口さんの将来像は、歴史上で初の「人生一〇〇年社会」です。女性リードで「人生一〇〇年社会」をめざす樋口さんご自身は「傘寿期」をすぎたばかりですが、お仲間とともに初代として「一〇〇歳」の到達点を見据えています。

内閣府が「高齢社会対策大綱」で、一〇〇年から一〇〇年を差し引いて「人生九〇年」時代としたのは、官僚の男性的指向性ゆえであると評しておられます。

「いまわたくしたちは、『人生一〇〇年社会』へという、人類の歴史のなかで初めての長寿を普遍的に獲得した社会を生きる、そしてそれにのっとった地域であろうと国であらうと、生きる主人公は人間であります。その人間の幸せのために、わたくしたちは初代として今日も一歩一歩努力をしているのだと思うと、『なかなかいい時に生まれちゃったじゃないか』と、わたくしなどはよろこばしく思うわけでございます」（内閣府「高齢社会フォーラム in 東京」基調講演「シニアの社会参加で世代をつなぐ」二〇一三年七月）



そして「戦後七〇年」に関しては、

「わたくしたちは『人生一〇〇年』のモデルをつくっていく幸か不幸か初代という光栄を担ってしまいました。人間さまざまな選択ができますが、生まれる時と場所は選ぶことができません。幸いにも、幸いにも戦争が終わって平和が訪れた中でのころつき、あるいは生まれました。そして戦後七〇年、ここにいらっしゃるほとんどの皆様は、『戦争を知らない大人たち』として七〇年を生きてきたわけでございます。．．．」（内閣府「高齢社会フォーラム in 東京」基調講演「シニアが主役 地域創生へ出かける、出会う、何かできる」二〇一五年七月）

男性たちが多く「戦場」をいうのに対して、命の尊さをいう「生む性」としての女性の発言には遠く未来が示されています。参考・付「日本の社会 将来の姿 この人の声を」

* 支え合う「地域共生社会」を

次は「さわやか福祉財団」の堀田力会長の講演から。

二〇一四年七月二九日、同じ内閣府主催の「高齢社会フォーラム in 東京」での講演で、堀田さんの声は暖れていました。この夏は東奔西走といった忙しさで、全国の自治体をまわって、「新地域支援構想」についての説明・講演をしておいでだったか

からです。

「支えられる高齢者」のための要支援などの事業が、「地域医療・介護推進法」の成立（二〇一四年六月）とともに二〇一五年四月から地域自治体に移行しました。住民のうちの元気な「支え手の高齢者」の介護予防（自助）とともに介護支援（互助）の自主参加が広く求められることとなります。自治体ごとに「地域支援コーナーディネーター（地域支え合い推進員）」と地域協議体を設置することで、かつては地域では当たり前だったお互いさま意識での助け合いのしくみ（共生社会）を、自治体ごとに住民の活動でつくりだそうという事業です。

堀田さんはこういいます。

『『共生の文化』というのは、どういうことか。中身に即して簡単にいえば、定年退職をして家に籠っている、あるいは外へ出て行く場所は居酒屋程度、あるいは家族で旅行はするけれども近所とのつきあいは一切なく、通りで顔をあわせれば目礼するだけ。こういう暮らし方は『恥ずかしい』、そういうふうみんなが感じるような風習、それを『共生の文化』というふうに呼びたいと思います』

住んでいる地域に関心が薄く、自分の「介護・医療」のときにだけ地域に頼るという内向的で自己中心的な暮らし方が「恥ずかしい」と感じるような生活意識を「共生



の文化」と呼んで、元気な高齢者へ自主参加を呼びかけているのです。

元気な高齢者が協力して、介護者ばかりでなく子どもでも障がい者でも困った人を支え合い助け合おうということで、新しいしくみである「生活支援コーディネーター」（地域支え合い推進員）と地域協議体を活かして、地域の活性化の核になるワークショップづくりなどについてアドバイスしています。とくに日々定まったしごととてなく、「毎日が日曜日」といった暮らしに慣れ親しんでいる六〇〜七〇歳代の退職後余生の男性に対して、八〇歳代の堀田さんは、「月月火水木金金」といった忙しさを全国各地の自治体をたずねてまわりながら、「社会参加による共生の文化」の創出を説いておられます。参考・付「日本の社会 将来の姿 この人の声を」

*成熟した「プラチナ社会」を

元東大学長の小宮山宏プラチナ構想ネットワーク会長は、「プラチナ社会」を推進しています。「プラチナ社会」というのは、成熟社会における成長の一つのモデルで、先進国として直面する課題の解決と新たな可能性の創造によってもたらされる、豊かで快適でプラチナのように威厳をもって光り輝く社会であると説明しておられます。

『長寿』というのは人類が文明を進展するにしたがって得た成果で、その『長寿社会』をどうやって活気あるものにしていくかに先進国は力をそそいでいる。これまでは物

量的な豊かさでしたが、これからはQOL。よりよい生活、誇りある人生が個人としての目標であるとともに、社会あるいは産業としての目標となっていく」

「個人がQOLを高めることの可能な社会が『プラチナ社会』。QOLを求めることと省エネルギーとか省資源とか自然共生とかは同じ轍を持っている。いい生活をしようとするばエネルギー消費が減る。ここが重要なポイント」（「産業革命からプラチナ革命へ」 日本「再創造」―活力ある長寿社会へのイノベーション RISE「コミュニケーション」で創る新しい高齢社会のデザイン」基調講演 二〇一四年二月一日）

と「産業革命」から「プラチナ革命へ」の推移を説き、「プラチナ構想ネットワーク」を通じて毎年、優れた事例を選考してプラチナ大賞・優秀賞を贈呈して活動の推進につとめています。参考・付「日本の社会 将来の姿 この人の声を」

*「リソースセンター」構想

東大高齢社会総合研究機構の秋山弘子特任教授は、高齢社会活動の成功事例を集めた「リソースセンター」の設立を提案し、実行しておられます。

「さらに研究活動や事業をおこなっている組織もふくめて、ネットワークの拠点を構築すること。知見を集約して使いやすい『リソー



スセンター』をつくる。コミュニティの課題解決のための『リソースセンター』ですから、ここにくれば課題解決の具体的な方策、情報、支援がえられる。主なミッションとして、アーカイブの作成です。日本中の成果を一カ所に集める。長寿社会のまちづくりを志している自治体あるいは町民のコミュニティに啓発、情報の提供、できれば人を送って支援をする」(RISTEX「コミュニティで創る新しい



高齢社会のデザイン 第3回領域シンポジウム」二〇一四年二月一日)

東大リーディング大学院での国際的人材育成や二〇一三年からはじめた「高齢社会検定試験」(高齢社会検定協会)による「高齢社会エキスパート」の認定、柏市でのまちづくり事業、RISTEX「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」の領域総括として全国一五プロジェクトの推進などを通じて成果を積み上げておられます。「ああいう国になりたいという国」がつけられるかを課題としておられる秋山教授の「アクション・リサーチ」を手法とする活動は、サンプルとして後追いかねならず成果に結びつくにちがいありません。(秋山弘子編著『高齢社会のアクションリサーチ 新たなコミュニティ創りをめざして』東京大学出版会) 参考・付「日本の社会 将来の姿 この人の声を」

* 「生涯現役の日」制定・普及委員会

「高齢社会対策大綱」の制定とその後の改定まで、有識者会議の検討委員として参加して、だれよりも経緯を熟知しているのは清家篤さんです。消費税八%が国会を通ったあと、清家さんが座長（当時は慶応義塾大学塾長）として、二〇一二年一月から二〇一三年八月まで「社会保障制度改革国民会議」で検討したのは、「医療・介護・福祉・年金・少子化」までであり、そのうち年金は結論を出していません。つまり本格的な「高齢社会構想」の議論には踏み込んでいません。国民会議では「高齢社会構想」についての発言までは清家さんは踏み込みませんでした。

日本初であり国際的歴史的な観点からいって、専任で清家篤高齢社会担当大臣を登場させるくらいでいいのです。慶応義塾塾長も重要なつとめでしたでしょうが、国際的歴史的な事業である「日本長寿社会ブランドデザイン」構想の検討と実現の場への清家さんの参加には、一〇〇年を隔てて福沢諭吉塾長も「しっかりやりなされ」と賛同されることでしょう。

その清家さんが前記の秋山さん、小宮山さんなどとともに有識者として参加しているのが、「生涯現役の日」制定・普及推進委員会です。二〇一八年七月に設立された民間の組織ですが、一〇月一日を「生涯現役の日」と定めて、行政とも協力しながら新しい社会の構築の活動をすすめています。

「人生一〇〇年時代」を迎えて、長寿社会をよりよく生きるための新たな生活様式あり方を模索し提案しようとしています。生涯現役という生き方です。

とくに企業人はこれまで一つの企業で働き定年後は余生という単線的な生き方でしたが、青年期、壮年期、高年期の三世代三期を通じて自立して活躍できる社会、仕事もなんだか変えて人生多毛作に生きる「生涯現役社会」をつくろうというのです。

仕事と同時に「人生一〇〇年」時代に対応した地域社会の形成も重要な活動のテーマです。若者から高齢者まですべての世代が協力する自助、互助、共助、公助のしくみの地域での形成も一方の重要なテーマです。

二〇二〇年一〇月五日にはオンライン・セミナー「新型コロナウイルスが生涯現役社会にもたらすもの その課題と展望」を主催しています。

・・・・・・・・

何度も繰り返し述べてきましたが、「平和団塊」のみなさんが中心にしてということであって、年長者も若いひとたちもともに参加しなければ完遂できません。が、歴史的にみても国際的にみても、わが国の「戦後っ子」の人びとがその「歴史的舞台」の主役であることはたしかです。

